

安定化の進む国境地帯（続編）

—進むカレン系武装勢力の協調関係—

佐々木 研*

2015年10月下旬に、久しぶりにミャンマー連邦カレン州東部を訪問した。今回は、国境の町であるミャワディを拠点とし、大学院時代に調査対象とした村落などを短時間ではあったが周ることが出来た。ミャワディ北部に位置するココ村はシュエ・ココ村と名を変え、以前訪問した時にはまだ計画中だった小さな商店が軒を並べる商店街もカジノもすでに営業していた。2008年に同村を訪問した際には民主カレン仏教徒軍（DKBA: Democratic Karen Buddhist Army）の第999特殊大隊の本拠地であったが、この大隊も含め大部分のDKBA部隊が現在では国境警備隊（BGF: Border Guard Force）に改編している。BGFは、国軍の指揮下にあり正規軍として位置づけられているため、カレン系武装勢力のなかでは唯一市街地内での武装が認められている。カレン州のBGFは4つのグループから構成されており、全グループで13個の大隊が存在する。第2、第3グループの主なメンバーは第999特殊大隊出身者であり、第1グループは他の旅団出身者、第4グループは他の旅団出身者に加えカレ

ン人民軍（KPF: Karen People's Force）出身者らにより構成されている。第3グループは、カレン州内のBGFのなかでは最大の勢力を有しており、シュエ・ココ村は現在この第3グループの本拠地となっている。

村には、BGF第2、3グループを事実上指揮する元第999特殊大隊長が経営する建設会社がある。この会社は、ミャワディからシュエ・ココ村を通り、国境沿いのメタワから西にはいってドーナ山脈の西に位置するマインジングーに至る道路の拡幅・舗装工事を行っているが、完成はまだ先になるとのこと。また、BGFは前回の訪問時と同様に農畜産物を生産してはタイ側に輸出したり、通関税を徴収したりしている。DKBAから正規軍であるBGFに改編し、各大隊には国軍の将校と下士官も所属しているとはいえ、上層部は第999特殊大隊と一部重複しており、組織としての独立性や経済活動の自由度はある程度維持されているようである。

ところで、現在のカレン州には国軍の指揮下にあるBGFとタンダウン特別国民軍（TSPA: Thandaung Special Public Army）の他、

* (株)サイエンスクラフト

独立性を保っているカレン民族同盟 (KNU: Karen National Union), カレン民族同盟／解放戦線和平協議会 (KPC: Karen National Union/Karen National Liberation Army-Peace Council), 民主カレン慈善軍 (DKBA: Democratic Karen Benevolent Army), 民主カレン仏教徒軍 (DKBA: Democratic Karen Buddhist Army) といったそれなりの勢力を保有する6つの勢力に加え、小規模な独立したカレン系武装勢力が混在している。ここでは、分裂の過程を詳細に説明することはやめておくが、元を辿れば90年代中旬以降に、KNUから分裂や統合を繰り返して現在の混在した状況に至っている。私が訪問した地域であるドーナ山脈の東部、ミャワディより北のメプレー川水系で主に活動しているのは、上述のうちBGFの第3グループ、KNUの第7旅団と司令部直轄の第101特殊大隊、KPCの3勢力である。

この地域はKNUでいえばもともと第7旅団管区に含まれており、旅団本部が置かれている国境沿いのラキーラ（あるいはレイワとも呼ばれる）では、全国から少数民族組織の代表が集まっては政府との和平交渉に向けた議論が交わされている。この地域で活動するKNUは建設会社を保有しており、前回の調査でお世話になった第101特殊大隊の大隊長が社長となっていた。この会社は、道路建設や旅行業の他に、難民などを受け入れるシェルターの建設も請け負っており、今回訪問したシュエ・ココ村南部のワンカー陣地跡やメプレー川沿いに遡ったT村でも、タイ側の難民キャンプから帰還する人々を受け入

れるためのシェルター建設を計画中とのことであった。

KPCは、2007年に当時KNUの第7旅団長が部下の一部を率いて国軍側に帰順し、新たに設立した勢力である。KPCは現在、ドーナ山脈の西側の麓にあるコーカレイ郡のトココ村（最近、ナウタヤー村と名を変えたらしい）に本部を置いている。風光明媚な景色の良いところだが、KNU初代議長のソウ・バ・ウジー（Saw Ba Ugy）が最後に潜伏していた地でもある。また、KNUがそれなりの勢力を誇っていた80年代後半から90年代初めまで、ラングーン（現ヤンゴン）等からKNUへ参加を希望するものは、ほとんどがこの村を通過しドーナ山脈を越えKNUへの合流を目指したという。KNUにとってはある意味象徴的な場所ともいえる。ラングーンに住んでいたあるカレン人は、1988年にKNUへの参加を目指して僧侶たちとともにこの村を経由してドーナ山脈を登ったとのこと。ただ、山頂付近で国軍とKNUが激しい戦闘を行なっているのを見て怖くなり皆で引き返したという。

ミャワディからT村を経由し院生時代に訪問したP村へ移動する際、何度かBGFの立派な駐屯地前を通過するが、その経路上でしょっちゅうKPCの車とすれ違った。また、T村にはKPCが建設した小学校、診療所もある（写真1）。T村が位置するのは、BGF第3グループがDKBAから改編する以前から支配していた地域内であり、現在も同グループの支配下にある。また、このグループの本拠地であるシュエ・ココ村の間近にあるワン



写真 1 T 村の学校



写真 2 ワンカー陣地跡の畑地

カー陣地跡は現在では牛の放牧地，ベイッ（豆），タピオカ畑となっている（写真 2）。

かつて KNU の第 101 特殊大隊が駐屯していたワンカー陣地跡の土地の多くは、今では BGF 第 3 グループの将校が保有者となっているが、KNU がこの地にシェルターを建設することについては BGF と KNU によりすでに合意がされているようである。

2015 年 10 月には政府と 7 つの少数民族武装勢力および全ビルマ学生民主戦線が全国規模停戦合意に署名した。KNU と KPC、DKBA のひとつ（Benevolent の方）も署名

に参加している。KNU 内には和平過程に慎重な姿勢を示す勢力も存在するが、第 7 旅団と第 101 特殊大隊は和平推進派である。つまり、メプレー川水系で活動しているカレン系武装勢力は、正規軍化した BGF を含めすべて和平推進派であるといえる。これらの勢力は、今では互いに対立するよりも協調して地域内の開発を優先しているようである。また、和平に対する態度もさることながら、この地域で活動する各勢力のキーパーソンの全員が元々 KNU 第 7 旅団出身であることも協調を促す要素になっているのかも知れない。12 月には村の郊外で、これまでで最大規模のカレン新年祭を開催する予定であり、打ち合わせのために KNU、DKBA（Benevolent の方）、KPC の代表者がシュエ・ココ村に集まるとのこと。

郊外にはすでに広大な会場が用意されていた。また、BGF の建設会社が整備中である前述の道路はメタワも通過するが、ここには全国規模停戦合意の署名に参加せず、最近になっても国軍や BGF と時折、武力衝突している側の DKBA（Buddhist の方）の一部が駐留する場所である。こうしてみると、カレン系武装勢力は、時には対立しながらも、インフラ開発に関しては協調関係を進めているようにもみえる。それは、自らの勢力の政府に対する態度や独立性の維持を指向する一方で、社会情勢の安定化とインフラ整備などの開発促進によって、権益の確保と向上を指向するという各勢力の思惑が反映された結果生じている状況なのかも知れない。

ところで、院生時代に滞在したことのある



写真3 P村の景色

P村を訪問したものの、農繁期であり村人はまばらだった(写真3)。この時期は、皆夜中まで働いているというので、インタビューをあきらめて引き上げることにした。2008年訪問時と同様に水田にはフィッシュトラップ

プがあちこちに仕掛けられており、家畜が村内を歩きまわる風景もあまり変わっていない。ただ、当時とは異なり、村のすぐ隣までゴムや豆、トウモロコシなどの換金作物の栽培を目的とした農場が広がっていた。社会情勢の安定化が進むのと同時に、生計を維持するうえでの周囲の自然環境への依存度はもしかしたら低下しつつある最中なのかも知れない。いろいろと興味の尽きない地域である。

引用文献

佐々木研. 2011. 「安定化の進む国境地帯—ワンカー陣地からココ村へ」『アジア・アフリカ地域研究』10(2): 309-313.

現代トルコにおけるイスラーム学復興

—イスタンブルの教育ワクフ ISAR・EDEP の現場から—

山本直輝*

イスタンブルにおける「我々の文明の再興プロジェクト」

筆者は現代トルコのイスタンブルにおけるイスラーム学の復興について関心をもち、イスラーム教育を目的として設立された教育ワクフ (Eğitim Vakfı) を対象にフィールドワークを行なっている。「現代トルコ」と

「イスラーム学の復興」という2つの言葉の組み合わせは、トルコの歴史に詳しい方は奇妙に聞こえるかもしれない。なぜならトルコ共和国建国に続く父ムスタファ・ケマル・アタトゥルクの一連の脱イスラーム化改革の一環として、オスマン帝国の悪しき遺産と考えられたスーフィー教団の活動拠点であるテッ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ケ（スーフィーの修行場）に加えイスラーム知識人の再生産の要であるメドレセ（宗教学校）は閉鎖され、神学・法学・スーフィズムなどの伝統イスラーム学を学ぶ機会は失われているからだ。しかし、親イスラームの公正発展党（Adalet ve Kalkınma Partisi）が政権を担い、イスラームの信仰に厚い人々が活動しやすくなった現在、再びイスラーム学の中心地としてのイスタンブルを復活させようと試みるムスリムたちがいる。彼らはこの試みを「我々の文明の再興プロジェクト（Medeniyetimizi Ihya Projesi）」と呼んでいる。イスタンブルに住むムスリムたちによるこのプロジェクトはまだまだ始まったばかりではあるが、本稿では今現在進行形で進んでいるこのイスラーム学復興の現場を少しでも紹介したい。

教育ワクフ ISAR・EDEP

ISAR・EDEP は、前者は男子学生、後者は女子学生を対象としてイスラーム学の教育を目的として設立された教育ワクフである。ワクフは本来イスラーム法学では宗教寄進地を指すが、現代トルコではより漠然と NGO とほぼ同じ意味で使われている。「西洋と東洋の架け橋」との二つ名のとおり、イスタンブルはボスポラス海峡を境にして西（ヨーロッパ）側、東（アジア）側に分かれているが、ISAR はアジア側のウスキュダル地区、EDEP はヨーロッパ側のファーティヒ地区に存在する。どちらもイスラームの信仰に厚い人々（*dindar*）が暮らす地区として知られており、ナクシュバンディー教団と呼ばれる

スーフィー教団が住民に大きな影響を及ぼしている。ISAR・EDEP の設立運営に関してもナクシュバンディー教団系財団の強力な援助により成り立っている。

トルコでは、モスクでの子どもたちを対象としたクルアーン暗記学校や、スーフィー教団の導師の説教（*sobbet*）などを除き、イスラームの知の営みに触れる機会はほとんど失われているとあってよい。さらに、近代国家トルコ共和国を建設していく中で、アラビア文字を使っていたオスマン語を廃し、ラテンアルファベットで書くトルコ語を用いるようになったため、トルコ人はオスマン朝時代に書かれたオスマン語の文献や正則アラビア語で書かれたイスラーム学の古典にアクセスする力を失った。ISAR・EDEP の設立者であるレジェップ教授はこのような問題に鑑み、トルコに暮らすムスリムたちが再びイスラーム学の古典を読む力を取り戻すための教育施設として ISAR・EDEP を設立した。



写真 1 ISAR 校舎外観

また ISAR はアラビア語で利他心, EDEP はアラビア語で (善き) 作法を意味し, 共にスーフィズムにおいて尊ばれている徳目であり, 彼らがイスラーム学教育のみならずムスリムの人格の涵養を目的に活動していることが分かる。ISAR は 4 年制, EDEP は 5 年制からなる綿密なカリキュラムが組まれている。入学試験はあるものの授業は完全無料であり, 無料の食堂や寮も備えている。1 年目ではアラビア語文法や会話, クルアーン読誦学等の授業が徹底して行なわれ, 2 年以降はアラビア語の古典を用いてハディース学や神学, 法学等のイスラーム伝統学の授業を学生は受けることになる。またヨルダンへのアラビア語研修もカリキュラムの中に組み込まれており, アンマンのシャーズィリー教団というスーフィー教団がバックアップしているアラビア語学学校で 1 ヶ月間アラビア語の夏期集中講座が開かれる。

ISAR・EDEP におけるイスラーム学の授業ではイスタンブール大学, マルマラ大学などで働く神学部 (ilahiyat Fakültesi) 教授の他, ヨルダンを拠点に活動しているアラブ人の伝



写真 2 ヨルダンでのアラビア語研修

統派ウラマーやシリアから亡命してきたイスラーム学専攻の大学生らが教師として活躍している。アラビア語の授業については, そのほとんどがシリア内戦により亡命してきたシリア人学生やウラマーたちによって行なわれている。また, ダマスカス大学の元学生が多いが出身地を聞くとほとんどがアレッポ出身者である。

特筆すべきは, ISAR・EDEP のイスラーム学の教授においてクルド系ウラマーが重要な役割を担っていることだろう。トルコ共和国建国後メドレセが廃止されたことは上述したが, 彼らクルド系ウラマーの話によればクルド人が数多く暮らすトルコ南東部, 特にディヤルバクルでは伝統的イスラーム教育が残存し, ウラマーたちが今でも数多く暮らしているという。彼らクルド系ウラマーはクルド語に加え, トルコ語・アラビア語両方を流ちょうに使いこなすことができ, シリアから亡命してきたアラブ人ウラマーとイスタンブールのトルコ人とをつなげる架け橋となっている。

ISAR・EDEP でイスラーム学, 特にイスラーム神学 (ilm al-Kalām) を教えているマアシューク教授はディヤルバクル出身のクルド人であるが, 私が聴講した授業では見事な正則アラビア語で思弁神学の議論の土台となる「知識論」について教授を行っていた。思弁神学の授業ではタフターザーニーの『ナサフィー信条注釈』を教科書として用いていた。これはオスマン朝時代にもメドレセの神学テキストとして広く使われていたものである。神学の授業だけでなく, アラビア語の文法学の授業もオスマン朝時代に高い評価を得



写真3 EDEP 校舎内

ていたビルギヴィー・メフメド注釈のジュルジャーニーのアラビア語文法書を用いるなど、授業ではオスマン朝時代に使われていたテキストを積極的に用いており、失われていたイスラーム学の復興を象徴している。

イスラーム学徒としての誇りを再び

EDEP の設立者のひとりであり、自身もアメリカの大学でイスラーム教育について研究しているエルバイラク教授はあるとき EDEP 設立の目的について私にこう話してくれた。「トルコのイスラーム実践を考えると、もっとも苦しい思いをしてきたのは信仰に厚い女性たちです。かつてこの国では…この国に暮らす人たちの大部分はムスリムであるはずなのに…信仰のために頭をヒジャーブで覆

う女性たちは高等教育の場にいることを許されず、非ムスリム世界であるヨーロッパやアメリカに行かなければいけませんでした。私たちはイスラームの実践を望んだがために、トルコから出ていかなければいけなかったのです。信仰を重んじ、知を求める若い女性たちが誇りをもってヒジャーブを被りイスラーム学を学べるような環境を作り上げるのが私の何よりの夢でした。」イスラーム学の授業の質の高さに加え、EDEP の校舎は内装も非常に美しく、食堂での食事なぜか男子学生用の ISAR での食事に比べ種類も豊富でかつ栄養バランスの整ったものが提供されており、信仰に厚い女子学生が快適にイスラーム学徒としての生活を送る環境が整えられている。

イスラーム学のルネサンスがもたらすもの

トルコにおけるイスラーム学復興の担い手たちが、自分たちの活動を「我々の文明の復興プロジェクト」と呼ぶとおり、彼らの目的はただ単にイスラーム学の知識を得ることだけではない。教育の現場ではトルコ人、アラブ人、クルド人がアラビア語という聖なる言語を通じつながり合い、利他心 (*isar*) に現れるような他者の尊重精神とムスリムとしての共同体意識を育てている。イスタンブルにおけるイスラーム学は、信仰と情熱に燃える若きムスリム学生と共に静かに、再び息を吹き返しつつある。

トゲの痒み

—フィリピン 貧困世帯向け条件付き現金給付プログラム (4Ps) の日常—

白石 奈津子*

いつもと変わらない朝。軒先でひとりコーヒーを飲んでいると、ステイ先のサリサリストア（小雑貨店）に近所の少年が買物にきた。家の人は裏で洗濯をしていたため、私が応対に出る。

少年に品物とつり銭を渡しながら私は、なぜ今日は学校に行っていないのか尋ねた。彼は素っ気ない様子で「今日は休めって父さんが、4PsのFDS（Family Development Session）があるから、弟がひとりになるからさ」と答え、家に帰って行った。

少年の母親は、ひと月ほど前、家政婦として中東に旅立った。今年中等学校を卒業する彼は、5人兄弟の長男として、父親が不在の際は2歳になる弟の面倒をみななければならない。頻繁に休んでいるわけではないとはいえ、成績も優秀と聞く彼がこうして家族の為に学校を欠席していることに、腑に落ちない気分になる。

現金給付プログラム 4Ps（フォーピース）

4Psとは、フィリピンの貧困世帯向け条件付き現金給付プログラムであり、フィリピン語の名称「Pantawid Pamilyang Pilipino Program」（フィリピンの家族のための橋渡

しプログラム）の頭文字をとってそう呼ばれる。社会開発福祉省（DSWD）を主体に、子どもの教育と保健衛生に関する意識の向上及び補助の供与、コミュニティ活動の活性化などを理念として提供される。受給対象世帯には、道徳講話や生活に関するレクチャーの受講、各種保険診断の受診等が義務付けられており、これを怠ると子ども1人あたりの満額支給額800ペソ（月額）からペナルティとして減額を受ける。先述のFDSへの参加は重要な評定項目のひとつであり、その他、子どもの出席日数や定期健康診断の記録などから減額分を算出し、実際の支給額が決められる。関[2013]によれば、4Psは前アキノ政権下における貧困緩和政策の目玉のひとつ



写真1 FDSの様子

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

であり、2012 年度の国家総予算 1 兆 8,160 億ペソ（約 4.7 兆円）のうち、395 億ペソ（約 1,027 億円）が 4Ps 向けに支出された。

一方この制度は「現金のばらまき政策であり貧困世帯の依存性を助長する」などとして、野党政治家や専門家など各所からの批判を受ける [関 2013]。

日常の中の 4Ps

私の調査先である東ミンドロ州では、このプログラムが 2011 年から提供されている。制度そのものに対する批評は既刊の諸論文に譲ることとし、今回私は「いかに人々の生活に 4Ps が入り込んでいるか」ということを記したいと思う。

たとえば、冒頭のエピソードが示すように、受給世帯の人々は、何を差しおいても FDS には出席しなければならない。だが、他にもマイクロファイナンスのミーティングや仕事を抱える受給者も少なくなく、FDS の開催日や主催者側による杜撰な時間管理の問題は、受給世帯員から日々、批判と噂的的となっている。

ある 50 代女性は「最近子どもを叱る時に安易に叩くことができなくなった。DSWD にみつかったら 4Ps から外される」と酒の席で話してくれた。また、フィリピンでは通夜の際に賭場が開かれるのが常なのだが、各種ギャンブルも 4Ps で禁止されている。別の 30 代女性は、近所の通夜の場にて「誰かが 4Ps に密告するかもしれない」と繰り返しつつ、ゲームの開かれているテーブルに近づいたり離れたりしながら、もどかしそ

うにみていた。その他の人々は「DSWD に密告する奴はいないな！」「4Ps から外されるぞ！」と大声で笑い合いながらゲームを続けていた。

またある時、別の DSWD 関連のプロジェクトのミーティングが開かれた。このプロジェクトに関しては、住民の関心が薄く、常々ミーティング出席者が少ないことに担当者が心を痛めていた。だがある日のミーティング前に「4Ps の受給世帯は必ず出席すること」という旨の通達が噂話のように流された。同じ DSWD のプロジェクトとはいえ 4Ps とは本来何の関係もないはずだが、その日のミーティングには会場から溢れるほどの人が参加した。「こういう風に 4Ps を利用するのは禁止されているはずなのに」と皆口々に不満を漏らした。

商売の場面でも 4Ps の話は頻出する。化粧品などの訪問販売をする女性は「もうすぐ 4Ps の現金給付日なのだから（買ってしまいなさいよ）」と購入を促す。逆に購入者の側から「来週が給付日だから、とりあえず掛買いさせてほしい」と頼む場面も度々目にした。

ここに書き尽くすことはできないが、他にも、給付対象世帯の選定や、給付金の使い道、伝統医療と保健センター受診義務の兼ね合いなど、日々の噂話の中に 4Ps の話題は尽きない。そして人々は「だって 4Ps でそう決められているから…」と繰り返す。

現金給付日の賑わい

4Ps に関連して人々が最も活気づくのは、やはり現金給付日である。都市部においては

ATMを通じた現金の給付が義務付けられているが、私の生活するような地方では、指定日に町の体育館にて手渡しで支給される。

公式には「Pay out day」と呼ばれる現金給付日を、人々は「サホッド¹⁾(給料)の日」と呼ぶ。その日には、町中の27のバランガイ(行政村)から全ての受給者が集合する。行政府のある建物に面した広場から車道にかけては、スナックや飲み物、子ども用のおもちゃを売る出店が立ち並び、さながらフィエスタ(祭り)のような賑わいを呈する。人々は、バランガイごとに色分けされたユニフォームに身を包み、立ち話をしながら自分たちの給付順がまわってくるのを待つ。そうした人々の間を、揃いのジャケットを着た携帯電話会社の販売員が、SIMカードを売ってまわっている。

ふと呼ばれて振り返ると、馴染みの行商の女性がいた。町から離れたバランガイを拠点にしている彼女だが、この日は借金回収のた



写真2 現金給付を待つ列に並ぶ人々

めにわざわざ町まで出向いてきていたという。

さて、私の暮らすバランガイは、町の中心部に比較的近いこともあってか順番が後回しにされ、なかなか給付が始まらない。昼近くになってようやく呼ばれたらしく、揃いのライトブルーのTシャツを着た人々が、ずらずると列を作って体育館の中に消えていった。

手持ち無沙汰になり体育館の入り口をひとりうろついていると、既に給付を終えた山の方のバランガイ出身の友人に会った。彼らは貸し切りのジープで町まで来たという。他にすることもなかったため、そのジープの所まで友人について行く。ジープでは平日にもかかわらず、親についてきた子どもたちがめいめいに寛いだり遊んだりしていた。

ここで、給付金の一部を小遣いにもらったという少女が、新しい下着を買いに市に行こうと誘ってくれた。この町では毎週水曜日に市がたつのだが、4Psの現金給付日には曜日にかかわらず市がたつ。

市に着くと、そこは既に色とりどりのユニフォームを着た人々でごった返していた。人々は受け取ったばかりの現金を手に、サンダルや服、日用品などを物色している。ビニール袋いっぱい購入した物品を抱えた人もいた。

人込みで連れれの少女をふと見失った。探していると、少し離れた店先からこちらに手を振っているのがみえた。かけよってきた彼女は、にやにやししながら私の耳元に顔を寄せ「こういう日は泥棒が出るから気をつけない

1) サホッドという語は給料も意味するが「(広げ手で)落ちてくるものを受け止める」という語感をもつ。たとえば、災害時に配布される支援物資はサホッドであり、天水田耕作を可能にする恵みの雨を人々は「サホッド・ウラン」と呼ぶ(ウランは雨の意)。



写真 3 ユニフォーム姿で市を巡る人々

と」と言った。

ふたりでジープに一度戻り、今度は親戚を探しているという別の友人について行く。少し離れた駐車場の隅で親類をみつけた彼女は、二言三言話をしてから私の方へ戻ってきた。「借金させてって頼んだのだけど嫌だつて。ケチ」と話す彼女に、恐る恐る、なぜ今日借金を申し込んでいるのか聞いた。すると「今日もらったお金は、お米を買った借金の返済で全部なくなったから、今日から使う分を借りて回っているの」と教えてくれた。

彼女と別れた後もひとりで市をふらついていると、給付待ちをしていた連れの女性からテキストメッセージが入っていた。「やっと終わった。どこにいる？」それに返信する前に、子ども用のサンダルと短パンの入った袋を掲げた彼女をみつけた。私に気が付くと彼女は、昼下りの熱気に少し疲れた顔で言った。「帰ろうか。おかずになるものを買ってから。」

その日は 1 kg の骨付き肉を買って帰った。

おわりに

4Ps が政権の人気取りのバラマキ政策であるという批判は、一側面として否定しがたい。特に、先日行なわれた 6 年に一度の大統領選挙戦において、キャンペーンを訪れる候補者たちは 4Ps の話を持ち出し、与党公認候補への投票を呼びかけた。こうした呼びかけは DSWD の派遣したスタッフからも聞かれた。だが、人々がそれに喜んで応じることはあまりなく、苦々しげな表情をする人さえ目にした。

実際、4Ps がもたらす現金は、批判されるようにそれに過度に依存し得るものでもない。だが少なくとも、私の調査先のような地方農村において、4Ps がもたらす現金は生活の一部となっており、人々はその存在を日々気にしている。他方で、プログラムが目指す人間開発の成果や、それをもたらす為の強制力の程を、はっきり肯定することも難しい。人々は日々 4Ps のことを口にしながらも、子どもを叩いて叱り、時間のある時には親しい人々とギャンブルをして過ごす。子どもはすぐに学校を休むし、病気にかかった時は、まず伝統医のもとへ行く。

そうした様をみていると、4Ps が示す数々な「訓示」は、人々にとって指に刺さった小さなトゲのようなものではないかと思えてくる。放っておくにもチクチクと気にかかり、かといって取り除くのもひどく億劫だ。だが、そんなトゲの「痒み」でも、じわりじわりと日々の生活に影響していくのである。

引用文献

関 恒樹. 2013. 「スラムの貧困統治にみる包摂

と非包摂—フィリピンにおける条件付現金給付の事例から」『アジア経済』54(1): 47-80.

人をつなぐ食

池 邊 智 基 *

太鼓の音が村中に鳴り響く。強い直射日光を受けつつ畑の除草をして疲れきった身体が、塩辛い食事を求めている。畑から少し距離はあるが、村のみんなが集まる場所へと足を運ぶ。太鼓の音を聞いて、近所の子どもたちも走って同じところへと向かう。Bakk na añ kay! (昼ごはんの太鼓が鳴ったぞ!) 遠くから私に知らせようと子どもたちが叫ぶ。¹⁾ 一今行くよと声を返して、少し足を早める。

私が調査をしているセネガル北部のN村では、村人全員が1ヵ所に集まって朝昼晩の食事をするという不思議な風習がある。マラブー（イスラーム指導者、聖者）でもある村長の家の前に皆で、100人を超える村人が集い、男は木の下に、女はトタン屋根の下に座り、毎回の食を共にするのだ。この村独特の風習に、1ヵ月も滞在したところで少しずつ慣れてきた。

セネガルの食事は、たいてい共食という形をとる。大きな盥（たらい）のような皿に

米やクスクスを主とした6〜7人分の食事が入っており、車座に皿を囲んで食べる。日本では「同じ釜の飯」を各々の茶碗に移して食べるが、セネガルでは釜から大皿へと移し替え、大皿を囲んで各々が手づかみで一口大に丸めて食べる。家族の数が多ければ、大皿の数が2つ、3つと増える。家長の父から先に食べるというのが通例であり、父が食べ始めると家族の食事は始まる。

たいてい、ひとつの世帯で用意される大皿は1枚〜3枚程度である。N村では100人



写真1 N村の食事前の風景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 文中のウォロフ語はすべて、Jean-Léopold Diouf. 2011. *Dictionnaire wolof-français*. Karthara の表記に従い、日本語訳は筆者が行なった。

以上で食を供するべく、15 枚ほどの大皿が毎回用意される。村人全員の共食は一体どのように行なわれ、そして、共食することによってどのような意味が込められているのだろうか。

バイファルの村

N 村はバイファルという宗教運動の村であった。バイファルは、セネガル国内で生まれたイスラーム神秘主義教団「ムリッド」の内部運動である。セネガルの全人口のうち 9 割以上がムスリムであり、おおよそ 3 割ほどがムリッド教団に属している [ANSD 2002]。

ムリッド教団の開祖アマドゥ・バンバ (1853-1927) は多くの弟子を抱え、イスラームの教えを説いていった指導者のひとりだった。その弟子の中にひとり、バンバの身の回りを世話するイブラ・ファル (1858-1930) という人物がいた。イブラ・ファルはバンバに初めて会って以来彼の側に付き従い、聖典クルアーン (コーラン) の学習と教育に身を粉にするバンバを支えるために、さまざまな雑務を行なった。イブラ・ファルはバンバのためならば、ムスリムの果たすべき礼拝や断食さえも行なわずに働いたといわれている。バンバのもとに集った他の信徒たちは、イスラームを軽視したととれるイブラ・ファルの行動に難色を示したが、一方で師に対する献身的な姿勢を評価する者もいた。いつしかイブラ・ファルの行動を真似た人々は、自らをバイファルと名乗り、各々のマラブーのために献身した。

現在でもバイファルの人々は、イブラ・

ファルと同様に、ムスリムに課されている礼拝やラマダーン月の断食を重視しない。マラブーに付き従い、献身的な労働を行なうことこそが神への祈りにつながると語る。その労働 (*liggey*) はマラブーへの一方向的な宗教行為というだけでなく、また現金に還元される賃金労働というだけでもなく、地域ごとに形成されるムリッド教団のコミュニティへの奉仕活動全般を意味している。たとえば、祭礼に集う信徒に食事やコーヒーの準備を集団で行なうという行為ひとつをとっても、バイファルたちが労働と呼ぶ教義の実践であるとみなされている。バイファルたちは、他人を助け、与え合うといった倫理的な価値観を強く意識しながら日々を暮らしている。

調査地である N 村は、ひとりのマラブー Maのもとに集まった 100 人程度の人々が居住している。そこはバイファルの教義を修行しながら学び、実践するための場である。隣村の D 村出身の Ma は、イブラ・ファルから直々に教えを受けたとされており、当初はダカールを拠点に活動していたが、1980 年代の終わり頃、拠点を首都ダカールから出身地へ移し、付き従った信徒と共にそこで修行のための村をつくった。これが現在の N 村である。

共食の実態

N 村では、村民全員が毎食の食事を村内の集会所 (*mbaar*) でとる。食事ができると、村内に「タンタンタン、タタンタ、タンタンタン」という儀礼で用いられる太鼓のリズムが響き渡る。これが合図となり、村中の人々



写真2 コーヒーを作るバイファル

が集会所に集まる。

朝ごはんは8時頃から始まり、パンと甘いコーヒーが配られる。パンは村内の窯場で焼かれる、フランスパンを模したものだ。コーヒーは村内にある装置で煎って作る。刺激的なギニアペッパー (*Xylopia aethiopica*) の香味と砂糖の甘さが絶妙な味わいとなり、気だるい朝の眠気を覚ます。

昼の10時頃から、昼ごはんの調理が始まる。主に3~4人の女性が当番制で選任され、おしゃべりをしながら野菜を切り、大きな鍋をいくつもかきまわす。このおしゃべりが長引いたり、作業に時間がかかったりすると、昼ごはんの時間も遅くなる。たいていは14時頃に合図の太鼓が鳴らされるが、16時まで調理が長引くときは、お腹を鳴らしながら合図の太鼓を待つしかない。

昼ごはんは主に炊き込みご飯チェブ (*ceeb*) である。野菜やササゲ豆を混ぜたコンソメスープでごはんを炊いたもので、酸味の効いたピサップ (*bisaab*, *Hibiscus sabdariffa*) のソースや、甘辛い玉ねぎソースが添えられている。油が多く使われたこってりとした味付けだが、レモンを絞れば爽やかな味に早変わ



写真3 昼ごはんを配膳する様子

りする。

晩ごはんはトウジンビエ (*Pennisetum glaucum*) を挽いた粉から作るチェレ (*cere*) と呼ばれるクスクスである。夜8時頃に配られ、食べ終わると *Bu suba* (また明日) と挨拶をし、床につく。チェレの上にはササゲ豆を加えたトマトソースが添えられ、季節によっては大根やキャッサバが大切りになって載せられる。チェレは、日本人には(少なくとも私には)馴染みにくい独特の酸味と食感があり、セネガルで生活を始めた当初は食べることが心底苦痛だった。しかし、昼食のチェブが脂っこくて胸焼けするのに対して、チェレはしつこくないうえ、酸味が次第にクセになる。長く滞在することで、自然と胃がチェレを求めるようになった。

私はこれまでに数々の家や村、友人の職場など、セネガルのいろんな場所で食事をとってきたが、ここまでシステム化された共食の形態をとっているところはなかった。祭礼や婚礼、命名式などで人が多く集まっているときにも、大きな皿がいくつも用意され、祝いの食事が配られることもあるが、祭りといっても1日か2日程度で、そう何度もあるわ

けではない。だが、N村ではこの共食を毎日続けているのだ。

共食の意義と効果

N村のマラブーMaは2014年の12月に亡くなった。それからは彼の息子Moが2代目のマラブーとして村をとりまとめているが、初代の人気はいまだに根強い。Moも、父の言葉を借りて信徒たちに語りかける。「私の父は言った。この村ではアッラーの教えを守り、みな働き、分け与えることが大切だと。父の言った *Lekk bu suur, naan bu mândi* (お腹いっぱいになるまで食べ、のどが潤うまで水を飲む) という言葉を守り、この村に来た人が叶えられるよう、私たちが食事を作り、共有するのです。」

N村の共食の運営は、村に住む信徒たちの上納金と、出稼ぎに出ている信徒の家族や、別の場所に住んでN村に巡礼にくる者の寄付金によって賄われている。この支払いはアディヤ (*addiya*) と呼ばれ、マラブーに献上する形で集められ、マラブーが村の人々に還元するという仕組みである。N村に住



写真4 祭礼時の食事を運ぶ人々 (トゥーバ市で撮影)

む者は、お金に余裕があればアディヤを差し出す。都市で出稼ぎする者は、銀行の送金システムを利用してアディヤを送る。現金がない者は、雨季に村内で栽培したササゲ豆やピサップをアディヤとして捧げる。村に関わる人々がお金や食べ物を出し合い、分け合うことで、共食の習慣は保たれる。ひとりのマラブーが伝えた言葉がきっかけとなって、大人数で分け合う共食の習慣が今もN村で続けられているのだ。

不思議で大がかりな食事だが、楽しい会話が生まれるきっかけにもなる。太鼓の音を聞いて集まってきたバイファルたちは、集会所に着くと挨拶を交わす。数人で大皿を囲めば、1日に幾度も顔を合わせる機会となり、他愛もない会話が生まれる。

「おい、お前の研究ってのはうまくいってるのか?」「まあ、なんとかね」「へえ、ジャポンにも米はあるのか?」「もちろんあるよ。こんな風には食べないけどね」「おれにもカンフー教えてくれよ」「やだよ、それは中国人だろ?僕はジャポネ(日本人)だ」「お前はシノワ(中国人)だと言われるといつも怒るな。何が気に入らないんだよ」「じゃあマリ人とモーリタニア人とセネガル人の文化がみんないっしょだって言えるのか?」「それは絶対に違う!」「ほら、君だって怒ってるじゃないか」

近況を話し、時折冗談を言う。こうしたやりとりを繰り返して、お互いの心理的な壁が取り払われていく。単に道端で顔を合わせて挨拶する以上の関係性が食事の空間に生まれる。総勢100人を超える大きな食卓に。

引用文献

ANSD (Agence National de la Statistique et de la Demographic). 2002. *Recensement General*

de la Population et de l'Habitat. (<http://anads.ansd.sn/index.php/catalog/9/datafile/F7/V409>)
(2016年7月23日)

嗜好品の原産地と世界市場のあいだ

—エチオピアでは味わえないエチオピア産のコーヒー—

川 股 一 城 *

コーヒーの国の国内市場

エチオピアは、コーヒーの年間総生産量が約42万トンにのぼり [CSA 2015]、アフリカ大陸内では最大の、世界でも有数の生産地のひとつである。現在、世界で利用されているコーヒー属の2種、アラビカ種 (*Coffea arabica*) とロブスタ種 (*C. robusta*) は、それぞれアフリカ熱帯低地とエチオピア高地が原産とされる [Pendergrast 2010]。もっぱらアラビカ種だけを栽培し利用するエチオピアでは、コーヒーセレモニーと呼ばれる様式化されたふるまい方にしたがって、ハレの場だけでなく家庭などでも日常的にコーヒーを飲む習慣が根付いている。

2016年1月31日、今回の調査でもお世話になったアジスアベバのA女史宅へ挨拶に行ったときのことである。私を迎えてAさんがさっそく目の前でコーヒーの生豆を煎りはじめ、ジャバナと呼ばれる素焼きのポット

も登場し、コーヒーセレモニーで歓迎をしてくれた。ちょうど日本のお猪口くらいの大きさのカップに淹れたてのコーヒーを慎重にそいでもらい、至福の一杯をまさにいただくとしたとき、Aさんに「砂糖がまだよ」と声をかけられた。コーヒーに砂糖を入れるのはオプションであると思っていた私は大いに困惑した。しかし、このあとエチオピアの人びとがこの砂糖をどれほど好んでいるか何度も思い知らされることにもなった。少なくとも今回のフィールドワークで私が出会ったアジスアベバの人びとは、このお猪口サイズのカップに砂糖を躊躇なく2杯、3杯と入れてコーヒーを楽しんでいた。

コーヒー発祥の地としてエチオピアでは古くから家庭でコーヒーが嗜まれてきた。今日のアジスアベバでは牛乳や砂糖で楽しむスタイルが一般的になった。しかし、焙煎した豆を煮出して利用する方法は、エチオピアの外

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

から伝えられたものとされ、古くはコーヒーノキの青葉を煮出したり、果実を噛んだりして利用されていた [Pendergrast 2010]。生豆を焙煎する利用法が確立されたあとも、各地で独特のコーヒーの利用方法が発展し、今なおその方法が残る地域も少なくない。たとえば、塩やバターを入れたり、果肉や果皮を煮出したりしてコーヒーを楽しむ [Pankhurst 1997]。

コーヒーは家庭だけではなく、街のカフェ



写真1 ジャバナ (写真左) と砂糖 (写真右)



写真2 アジスアベバ大学内のカフェで出される砂糖と牛乳たっぷりのコーヒー

やレストラン、大学のオフィスなどで日常的に飲まれている。アジスアベバでも下町に入れば道ばたで女性がコーヒー豆を煎ったり、炭火にコーヒーポットをかけたりしている姿を目にすることも珍しくない。街角の雑貨店では生豆が量り売りされていて、ほんの少量でも売ってくれる。大型のスーパーマーケットに行くと綺麗にパッケージされた焙煎豆も陳列されている。アジスアベバでコーヒーを目にすることなしに暮らすのは困難といえる。

コーヒーはエチオピアの重要な外貨獲得源である。しかし、輸出農産物の第1位産品でありながら [Petit 2007]、毎年じつに総生産量の半分ほどが国内で消費されている [ICO 2016]。つまりエチオピアのコーヒーは国内と国外に2つの大きな市場をもっていることになる。発展途上国が生産し、先進国が輸入して消費するという、世界で支配的なコーヒー流通システムに比べると、このエチオピア国内での市場流通は大きな特徴といえる。

新しく開設された取引所

エチオピアでは、それまでオークションを中心に実施されていたコーヒーの取引を、2008年に一新した。新しく開設された取引所はECX (Ethiopia Commodity Exchange) と呼ばれ、コーヒーの他にトウモロコシやインゲンマメ、コムギ、ゴマなどエチオピアで生産される農産物を扱う。2000年代初頭のコーヒー危機を教訓にして、その取引価格の乱高下をおさえることをおもな目的にECXは開設された。アジスアベバのみならず地方

の農村の小さな電光掲示板にまで相場の速報値が伝えられる。しかし、ECX がすべての問題を解決したわけではなさそうである。たとえば、「ニューヨークのコーヒー先物価格が急騰してもエチオピアでの取引価格が同じような価格幅で動くことはない」と、調査に協力してくれた輸出企業の担当者は話してくれた。コーヒーの流通を一手に引き受けて品質管理と格付けもおこなおうとした ECX だが、導入から数年たった今も、時間がかかる流通システムや不安定な品質を焙煎企業や輸出企業の多くから指摘されている。

国内向けと輸出向けのコーヒー豆

品質が不安定になる原因のひとつに、現在のコーヒー格付けシステムがある。2008 年からエチオピア政府はカップパーと呼ばれるいわゆるコーヒー豆の鑑定士の資格制度を開始した。試験に合格した政府公認カップパーのみが ECX にてコーヒーの格付け作業にあたるが、現在国内にいる公認カップパーは 100 人以下といわれ、年間 40 万トンを超えるコーヒーの生産量に見合っていない。焙煎や輸出をおこなう企業の間では、ECX でおこなわれる格付けに対してさまざまな問題のあることが情報として共有されている。たとえば、「サンプルの検査体制が不十分」であるとか、「格付けどおりの豆が購入したすべての麻袋に入っていることは稀」という指摘をきくことができた。ECX から買い付けた豆の品質が不安定なことを揶揄して、「まるでクリスマスだよ。最初の袋をあけるまでどのような品質の豆が入っているかわからないから」と

話す輸出企業の担当者もいるほどであった。

ECX ではコーヒーの格付けがどのようにおこなわれているのだろうか。

格付けでは、まず豆の水分量や大きさ、収穫からの保存期間によって国内市場向けの豆と輸出向けの豆に大きく分けられる。国内市場向けの豆はそれぞれの項目で輸出の最低条件に見合わなかったものや、腐敗や虫害を含めた欠損豆の混入率が高いものである。その後、水洗式と非水洗式の豆に分けて格付けが進められる。国内向けの豆は生豆の状態のみで格付けされるのに対して、輸出用の豆は生豆に加えて焙煎した豆からコーヒーをいれて格付けするカップピングテストが課せられ、国内向けの豆よりもより細かい等級に分けられる。

輸出向けと分類されたコーヒーは、民間の輸出業者に買い取られ、精選の工程をへて輸出される。この工程で全体量の 20-30% ほどの豆がサイズや腐敗、虫害、欠損などの理由ではじかれ、そのすべてが再び国内向けの豆として ECX を介して取引される。つまり、一般的に国内市場で流通する豆は輸出向けのものよりも品質や大きさの観点から非常に劣った豆であるということがいえる。

精選作業の機械化

コーヒー豆の選別・精選といえば、ベルトコンベヤーの両側にずらりと並んだ作業員が手作業で選別している風景を頭の中に描いてエチオピアに渡った。しかし、アジスアベバで選別をおこなう企業では機械化が急速に進んでおり、重さや大きさ、色を判別して不純



写真 3 精選工場の一角，使用されなくなった手作業のためのスペース



写真 4 色で選別をおこなう大型の最新機器

物や欠損・劣化豆を取り除き，生豆を精選する作業のほとんどが機械でおこなわれていた。機械で精選作業をおこなう理由としては，品質のばらつきを最小限におさえることとコスト削減と答える企業が非常に多く，国際市場が求める等級どおりに品質を平準化した豆を供給しようという企業努力が垣間みえた。じっさいに，工場で精選作業をおこなった直後や，ジプチ港で輸出する直前の生豆に対して，政府機関による検査がおこなわれ，

等級を下げられる経験をした企業も存在した。そのために，企業は機械化によってより正確で質の高い精選作業を実現しようとしている。2016年3月にアジスアベバで開かれた世界コーヒー会議の展示ブースでは，焙煎企業や輸出企業に混ざって大型で高性能の選別機械を売り込む企業も目立っていた。

エチオピア産コーヒー豆とは

私たちが日本やヨーロッパで味わえるエチオピア産コーヒーは，すべてこうしたカッパーによる格付けや何工程にもわたる精選作業と，政府機関の検査をへて輸入されたものである。そのエチオピア産コーヒーは，新鮮で粒の大きく，品質保障された「高品質エチオピア産コーヒー豆」といっても過言ではない。しかし皮肉なことに，コーヒーの原産地にいながらエチオピアの町で暮らす人びとは，彼らの土地で育てられた高品質なコーヒーを味わうことができない。

外貨獲得のために輸出向けと格付けされたコーヒーの生豆は，基本的にすべて輸出企業により精選され，輸出されるまで政府が管理と検査をおこなう。例外的な事例や非公式のルートも存在するが，エチオピア国内向けに流通しているコーヒー豆のほとんどは，収穫から一定以上の時間が経過しており，劣化や欠損が目立つものが多い。あるいは輸出向けの豆を精選する作業ではじかれた「低品質エチオピア産コーヒー豆」なのである。もちろん国内市場の豆を扱う企業でも焙煎技術を向上させており，ある程度の品質が保たれた焙煎豆が流通して大型スーパーマーケットなど

に並べられはじめている。しかし、私たちがエチオピア産コーヒーとして味わうスペシャリティコーヒーなどの最高級品質の豆や、輸出専門の企業が展開している自社農場で品質を徹底的に管理した豆などはエチオピア国内では到底手に入れることができない。

帰国後、そのような「不条理」ともいえるエチオピアのコーヒー流通の状況に思いを巡らせながら、日本で百貨店の売り場にならぶ「エチオピア産コーヒー豆」の価格に目を丸くして過ごす日々である。

引用文献

Central Statistical Agency (CSA). 2015. *Report on Area and Production of Major Crops* (Vol. 1).

Addis Ababa, Ethiopia: Central Statistical Agency.

International Coffee Organization (ICO). 2016. *World Coffee Consumption*. (<http://www.ico.org/prices/new-consumption-table.pdf>) (April 8, 2016)

Pankhurst, Rita. 1997. The Coffee Ceremony and the History of Coffee Consumption in Ethiopia. In Katsuyoshi Fukui, Eisei Kurimoto and Masayoshi Shigeta eds. *Ethiopia in Broader Perspective: Papers of the 13th International Conference of Ethiopian Studies Vol. II*. Kyoto: Shokado.

Pendergrast, Mark. 2010. *Uncommon Grounds: The History of Coffee and How It Transformed Our World*. New York: Basic Books.

Petit, Nicolas. 2007. Ethiopia's Coffee Sector: A Bitter or Better Future? *Journal of Agrarian Change* 7(2): 225-263.